

## 社会学原論 第 24 回

( 12 月 20 日 )

### 12 . 女性 ・ 家事 ・ 資本主義 フェミニズム ( つづき )

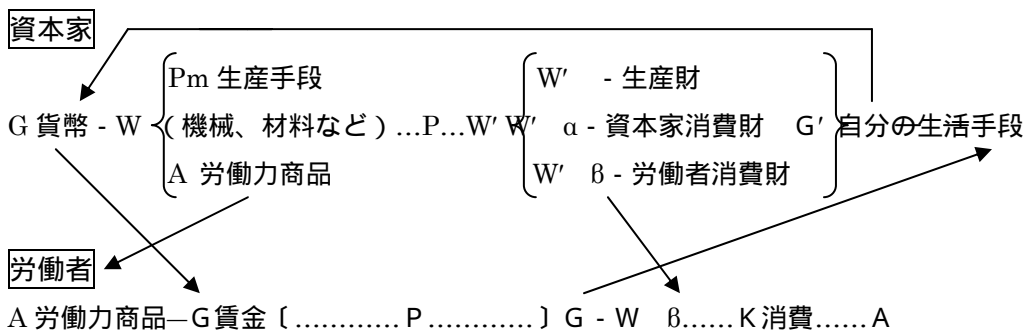
#### ( 2 ) 家事とは何か

前回、主婦がいつ誕生したかについて論じた。「労働」と「家事」が市場で支払われるか  
いなかによって区別されること、女性が「家事」だけをするということは資本主義の成立  
後生じたということ、日本では 1975 年ぐらい、世代では 1946 ~ 50 年生まれのいわゆる「団  
塊の世代」がもっとも「主婦化」したこと、などを話してきた。

では、家事とは何か。また、家事やそれをする主婦と「ゆたかな社会」、資本主義の仕組  
みはどのようにつながっているのだろうか。市場が成立してはじめて「家事」が成立した、  
ということはわかるが、実質的にそれはどんな関係があるのか。

まず、メキシコの世界思想家イヴァン・イリイチの『シャドウ・ワーク』を見ておこう。  
彼は、現代の社会を支えているものは、財とサービスの生産であるが、これだけではない、  
と考える。生産、あるいは市場で支払われる労働は、さまざまな支払われていない活動が  
あってはじめて可能になる。たとえば通勤、受験勉強、などはエネルギーを使う活動であ  
るが、全然支払われていない。しかし、これによって賃労働が(あるいはその質の高さが)  
可能になる。この、ただ働き = 支払われない労働のことを、彼は shadow work と呼ぶ。生  
産・労働という過程は、支払われない労働なくしては存在しえない。そしてこれらの活動  
は、支払われないことによって、価値が見えなくなっている。そして、「家事」もこうした  
シャドウ・ワークのひとつだと考えてよいだろう。

しかし、では、これらの支払われない労働は、一体どんな「価値」を持っているのか。  
イリイチのこうした主張を超えて、その価値自体を考えようとしたのが、マルクス主義フ  
ェミニストたちである。前期で話したマルクスその人は、家事について敏感ではなかつた  
し、社会における女性の位置についてもあまり考えなかつた。だが、家事は資本主義とい  
う仕組みの中でどんな役割を果たしているかについて、マルクスの理論を借りて考えれば  
わかるのではないかとフェミニストたちは考え始めた。



以上の図でいうと、マルクスは支払われる労働について研究し、生産過程 = Pにおいて価値が生産されることを軸に考えた。ここでの搾取が資本主義における価値蓄積の鍵とされるのである。「家事」は、この図では消費 = Kの位置にある。そして、マルクス主義者たちは、消費は何も価値が生まれないものと考えた。消費 = 家事というのは、生産によって生み出された価値を使い果たす過程であるととらえたのである。

しかし、「モノ」の価値から考えると消費というのは価値を減らす過程だが、もう一つの側面、つまり「労働力」ないし「ヒト」の価値から考えると、異なって見えてくる。労働者は、生産過程で「労働力」という価値を使い果たし（消費し）、その力を消費過程において獲得・回復する（再生産する）。これなしには、翌日労働者が働くことが出来なくなる。労働力が生産において価値を生んでいるとするならば、この労働力自体を生産する労働 = 「家事」は、「モノ」の価値を生産する過程 = 資本主義を支える基盤なのではないか。

家事が生み出す価値を、三つに分けることができる。すなわち、

夫の労働力

妻自身の労働力

子供（次世代）の労働力（育児、生命の再生産）

しかし、家事（育児）は、「ただ働き」、つまり無償労働である（ないし、妻自身の労働力再生産費用しか支払われない）。代価の支払われない家事が、モノの生産を支える。こうして、愛という名のもとに（イデオロギー）家事という労働は支払われず、これに支えられて、資本主義という仕組みは続く。もし女性の労働がなんらかの形で支払われることになったら、資本主義は直ちに存在しえなくなっているだろう。

マルクスは工場の中で搾取が存在していると言うことに注目したが、フェミニストたちの研究は、家族の中にも搾取が存在しており、これによって資本主義がつづいていくというようなことを、明らかにした。モノの生産とヒトの生産、この二つの過程によって社会は支えられている。その中でヒトの生産過程は、支払われないことによって、資本主義が支えられている。ここに「家事労働」が位置づけられる。以上の議論で、「家事」がいかなる価値を生み、資本主義との関係がどのようなものかは、明らかになったことだろう。

### （3）「ゆたかな社会」の主婦 = 労働者

ここまでは、無償で家事労働をする存在としての主婦がいつごろ誕生し、また主婦のする家事は資本主義という仕組みの存続にとってどんな役割を果たしているか、を論じてきた。家事を市場の「外部」に置き、無償労働にすることで、資本主義が支えられる。

しかし、この状況もまた変わっていく。11. で述べた「普遍的市場」を思い出せばいい。耐久消費財やレトルト食品などが家庭の中に入ることで、「家事」は、商品市場に組み込まれていった。「家事」の「知や技能」を破壊し、そこに商品を持ち込むことなしには、資本主義は拡大していくことができない。「ゆたかな資本主義」は、「家事」と「主婦」にも、

大きな変動を与えるのだ。

ゆたかな資本主義は、女性を主婦のままでいさせるわけにはいかない。いま述べたように、商品市場を拡大するために（消費力として）、そして、その商品を購入するために女性は市場に入り、労働者として働き始める（生産力として）。この20年間、このような変化が起こり、「主婦化」傾向は低下した。M字型就業曲線を見ると分かるように、その右肩が上昇している。つまり、40代～50代の主婦が就職・再就職し始めたわけである。これを「主婦＝労働者」の誕生、と呼んでおこう。

では、主婦が働くというのは、どういう意味を持っているか。いくつかに分けよう。

耐久消費財・家電製品を購入する。これは一方で、主婦にとって家事が楽になって、働きに出ることができることを意味する。またこれを通して市場が拡大する（これなしには市場は拡大せず）、資本主義は危機を迎える。同時に、家電製品などの耐久消費財を購入することで消費支出が増える。このために、主婦は働きに行かざるを得ない。主婦が働きに出るもう一つの理由は、少子化で育児が手間かからなくなることである。他方、その少数の子どもへの教育支出が増える。そのため、主婦は家計補助のために働かなくてはならない。

教育によって子どもたちが、高学歴の労働者、ホワイトカラーとなるが、一方、社会の中では、低賃金、未熟練な労働力も必要である。例えばスーパーのレジ、ビルの清掃などが、社会の中で必要とされる。若い人が高学歴になると、こうした労働をになう人がおらず、労働市場でミスマッチが起こる。これをどう埋めるかが先進国共通の問題であり、ロボット化、移民、高齢者などの回答があるが、日本は主婦パートの労働力でこれを埋めた。これは、ヨーロッパやアメリカ（移民を用いる）とは違うやり方である。（以上は、1990年の上野の著作によるが、ここで「フリーター」はまだ現実味を帯びていない。）

こうして、主婦は未熟練で低賃金な労働力市場に参入する。これが可能である条件は、彼女たちの働き方が「家計補助」（家計を助ける、であって、家計を支えるではない）ことにあり、家事・育児は主婦がすることが前提になっている、ということである。主婦は、自分の家事・育児に都合の悪くない働き方を求め、パートタイムを選ぶ。同じ仕事をしていても責任の小さい＝家庭の事情で休むことのできるこの立場の労働者を、企業は正社員より安い賃金で雇い、不況になるとまっさきに解雇する。こうして、主婦＝労働者は、家事労働とともに、低賃金で不安定な労働力として、資本主義を支えることになる。

かつての資本主義（「主婦化」した）において、主婦は労働力の「再生産労働」を無償でになう役割を負っていた。いまやそうした時代は終わり、主婦は、「再生産労働」とともに低賃金の「生産労働」をするという「二重負担」の状況にある（そして、そのことによって「ゆたかな」消費市場が広がる）。このふたつの役割によって（きつい表現をとれば、ふたつの領域での搾取によって）、現在のゆたかな資本主義は支えられているのである。

## 参考文献

- 上野千鶴子 1990 『家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店
- 落合恵美子 1994→1997 『21世紀家族へ [新版] 家族の戦後体制の見かた・超えかた』  
有斐閣
- Illich, I. 1981 = 1982 (玉野井芳郎・栗原彬訳) 『シャドウ・ワーク』岩波書店